

# 大津波被災の各地

# ボランティア 日本から次々



スリランカで支援活動を行うNPO「AMDA」のメンバー＝AMDA提供

インドネシア・スマトラ島沖地震の被災地で、非営利組織(NPO)など日本のボランティアグループの支援が本格化している。津波の本当の怖さを知らずに被害を体験したスリランカ沿岸部では医師らが医療活動や衛生状態の改善に加え、「地震への備え」も伝えていると奔走。タイでは日本の警察OBが遺体の身元確認で陣頭指揮を執っている。(1面参照)

## 「トイレ足りない」 スリランカ

【コロンボ(スリランカ)】難民雄人、佐竹美約八万人が避難生活を送るスリランカ。二〇〇三年に現地に事務所を設け、移動診療所で医療活動を行ってきたアジア医師連絡協議会(AMDA)が、岡山市は、津波が発生した先月二十六日から食料を調達。北部や東部の避難所で配布した。数日中に、約四千五百人が犠牲になった同国南部のハンパントタなどに医師や看護師を派遣し、医療活動を開始する。

タイで最大規模の犠牲者を出した南部カオラック。遺体安置所となったバンルアン寺では、日本人ボランティアが率いるタイ警察の鑑識チームが遺体の身元確認に追われていた。

## 警察OB、身元確認を指導 「遺体 家族のもとに」

「だいたい慣れてきたみたいだ」。戸島国雄さん(64)は約二十人のスタッフの動きを目で追いつつ語る。遺体から親指の皮膚の一部を切り取った後、インクをつけて用紙に記録、指紋を採取する。周囲には数百の遺体。臭気の中での作業が続く。



遺体安置所の作業に当たるボランティア。活動は初め、現場は初めてと驚く。津波

を訴える予定だ。長谷川さんは「津波や地震の知識を伝えるなどの防災教育を進めたい」と話した。

○二年から北部を中心に職業訓練を通じた生活支援を行ってきた「フリスシ エーシア ジャパン」(BAJ、東京都渋谷区)は日本人スタッフ四人、現地スタッフ約五十人が先月二十六日に北部の町に入り、食料や衣類を届けたり、けが人を車で搬送したりした。

東村康文スリランカ駐在代表(43)は「町中の家が倒壊しがれきの山となっていては、BAJは被災地で建築技術などの職業訓練も検討している」と話した。

「これまでスリランカでは活動していなかったNPOも次々に現地入り。『ジャパン・プラットフォーム』傘下の五団体は今月一日までに現地入りし、被災状況や支援方法の調査を始めた。

日本国際民間協力会(NICCO、京都市)は一日から、南部のハンパントタを調査。折原徹

は被災地で建築技術などの職業訓練も検討している」と話した。

「これまでスリランカでは活動していなかったNPOも次々に現地入り。『ジャパン・プラットフォーム』傘下の五団体は今月一日までに現地入りし、被災状況や支援方法の調査を始めた。

日本国際民間協力会(NICCO、京都市)は一日から、南部のハンパントタを調査。折原徹

は被災地で建築技術などの職業訓練も検討している」と話した。

## 日本アンテナ

正務局長(36)は「多くの寄付があり物資は足りているが、避難所は少し詰めの状態。仮設住宅の建設を急ぐ必要がある」と話す。

タイ在住の邦人援助活動を開始  
「クラヒ(タイ南部) 津田洋子(タイのオーケ